

IP THRIVE

Voices

挑戦を止めない。

挑戦の裏側には、必ず戦略がある。
起業家と支援者が語る、実践知財のリアル。

社会で活躍する
女性起業家・経営者たちによる、
実践×知財×共感の広がる場。

守るだけじゃない。
事業を前へ進める“攻めの知財”とは何か。
起業家と支援者が語る、リアルな実践録。



IP THRIVE *Voices* [2025.10.6開催]

社会で活躍する女性起業家・経営者たちによる、
実践×知財×共感の広がる場。

INPITは10月6日、大阪・関西万博にて「IP THRIVE Voices」と題し、社会の第一線で活躍する女性起業家たちが登壇するイベントを開催しました。本イベントの大きな特徴は、単なる事業の紹介に留まらず、自身のアイデアを守り育て、社会や企業と対等に渡り合うためのカギ(知財)のリアルな活用術を共有する「実践と共感の場」であることです。当日の各セッションでは、多様な生き方を体現するロールモデルたちが、知財を軸としたこれまでの挑戦と未来へのビジョンを熱く語り合い、会場全体が次なる一歩へのヒントと深い共感で包まれる時間となりました。



キーセッション「知財とビジネスとデザインと。」



株式会社ウツワ 代表取締役
株式会社メルカリ 生成AI推進担当
ハヤカワ 五味



株式会社ロスゼロ 代表取締役
文部科学省アントレプレナーシップ推進大使
NPO法人 同志社大学産官学連携支援ネットワーク 理事
大阪大学大学院 国際公共政策学科 招へい教員
豊中市経営改革専門委員
文 美月

セッション01「なかったをデザイン。」

自らのプロダクトを持つ起業家たちが登壇。知財で価値を守り育て、事業を加速させる実践を語りました。



第1回 RED TOKYO ファイナリスト(東京都)
株式会社LUNDATTE 代表取締役社長
木村 千瑛



第4回 LED KANSAI ファイナリスト(大阪府)
株式会社SceneryScent 代表取締役
郡 香苗



第1回 LED KANSAIファイナリスト(大阪府)
平安伸銅工業株式会社 代表取締役
竹内 香予子



第1回 RED CHUBU ファイナリスト(愛知県)
みはたま株式会社 代表取締役
山本 美沙



セッション02「伝えたいをデザイン。」

自分の「思い」やブランドをどう守り、どう広めるか。知財の活用や費用対効果を、リアルな体験談から学びました。



第11回 LED KANSAIファイナリスト(京都府)
株式会社抹茶ソリスム 代表取締役社長
新条 正恵



第11回 LED KANSAIファイナリスト(兵庫県)
株式会社Mutter 代表
武市 圭



第11回 LED KANSAIファイナリスト(兵庫県)
YUKATA LIFE 代表
松井 未季



第5回 LED KANSAIファイナリスト(京都府)
株式会社TAJIRO 代表取締役
三好 亜海



セッション03「もったいないをデザイン。」

知財取得の経験や失敗談、不安を分かち合いながら、未来に向けた技術開発や挑戦の可能性を語りました。



第3回 LED KANSAIファイナリスト(京都府)
株式会社minits 代表取締役
石井食品株式会社 社外取締役
中村 朱美



第6回 LED KANSAIファイナリスト(京都府)
株式会社colourloop 代表取締役
内丸 もと子



第1回 RED KYUSHU ファイナリスト(福岡県)
株式会社IPay 代表取締役
サステナブル事業プロデューサー
上官 ゆい



第1回 RED KYUSHUファイナリスト(大分県)
アップソールカンパニー株式会社 代表取締役社長
中原 ひとみ

セッション04「これからをデザイン。」

これまでの歩みと、これから描く未来。知財を軸に、新しい挑戦へのビジョンを語りました。



第5回 LED KANSAIファイナリスト(大阪府)
株式会社With Midwife 代表取締役
岸畑 聖月



第11回 LED KANSAIファイナリスト(大阪府)
一般社団法人Bridge Heart 代表理事
池田 優里



第8回 LED KANSAIファイナリスト(大阪府)
株式会社BeLiebe 代表取締役
志賀 遥菜



第10回 LED KANSAIファイナリスト(大阪府)
株式会社WellSideMeeting 代表取締役
松原 沙也加

「振り返りセッション～Voices Reflection～」

各セッションで交わされた言葉と想いを、未来へつなぐ振り返りセッションでした。



株式会社大阪取引所 総合管理室
株式会社東京証券取引所 上場推進部 課長(大阪IPOセンター)
田村 満



キャンマーケティングジャパン株式会社 R&B 推進本部
BizDevセンターグループマネージャー
西塚 まどか



saturdays株式会社 CEO
井本 達也



INPIT近畿統括本部
鈴木 貴久

万博ダイジェストはこちらから INPIT Channel
女性起業家のリアルと知財のチカラ | IP THRIVE 「Voices」Digest (大阪・関西万博)



【PROFILE】株式会社minitts 代表取締役 / 石井食品株式会社 社外取締役 京都教育大学卒業後、2012年に「佰食屋」をオープン。1日100食限定という常識を覆すビジネスモデルで数々の賞を受賞。2023年からは石井食品の社外取締役も務める。今後は大学での教育活動など、次世代の起業家育成にも力を注ぐ。

自分たちの価値を 正しく相手に渡す器

AKEMI NAKAMURA

中村朱美

自分たちの価値を正しく相手に渡す器。

「佰食屋」を展開し、ビジネスの最前線を走り続ける中村朱美さん。知財という器を持っていたことで、彼女のビジネスは物理的な店舗のキャパシティを軽々と飛び越え、新しいゾーンへのビジネス拡大と持続可能性を手に入れました。知財がひらいた、夢へと続く未来の扉。現在、中村さんは長年の夢だった「大学の教壇に立つ」という新たなステージの扉を開こうとしています。学生たちに起業のリアルを教えるその授業には、必ず「知財」のカリキュラムを組み込む予定だといいます。飲食店から始まり、自らの足で全国へ事業を伝え、大企業との対等な共創を実現し、未来の起業家を育てる教育者へ。そのキラキラと輝く人生の軌跡を振り返ったとき、そこにはいつも、歩みを力強く前へと進める「知財」の存在がありました。挑戦を恐れないために。理不尽に夢を奪われないために。そして、自分たちの本当の価値を証明するために。彼女が見つけた「未来をひらく鍵」は今、新しいステージへ向かう若者たちへと手渡されようとしています。自身の人生とビジネスを切り拓いてきたリアルな軌跡と、次世代へと託す熱い思いを伺いました。

まずはどんなビジネスをされているか教えてください。

1日100食限定の「佰食屋」という飲食店を営んでいます。常識を覆すビジネスモデルとして注目いただき、売り上げも順調に推移しました。しかし、飲食店というビジネスには、どうしても越えられない壁がありました。店舗の席数や客単価によって、年商の上限が最初から決まってしまうのです。全国への多店舗展開という選択肢もありましたが、自身のライフスタイルとのバランスを大切にしたいとの思いから起業したこともあり、店舗を京都市内にとどめる決断をしました。代わりに選んだのは、「自分たちの事業（ビジネスモデル）を伝える」という手法でした。おかげさまで、たくさんの方にお声掛けいただき、佰食屋の画期的な仕組みを題材に、全国各地で講演の機会を頂戴し、自らの言葉で発信し続けることでビジネ



知財についてどのような 経験をされたのでしょうか？

突然届いた内容証明。そこから「身を守る術」を学びました。起業してビジネスが軌道に乗り始めた頃、大手の法律事務所から商標に関する内容証明が突然届いたんです。当時は知財の知識がなく、本当に恐怖で震えました。藁にもすがらる思いでINPITの無料相談に駆け込むと、専門家が親身に対応してくださり、お金をかけずにピンチを脱することができました。この痛烈な経験から、知財は「自分たちを守るために絶対に必要なもの」だと骨の髄まで痛感したの

そこから「攻めの知財」へと 意識が変わったきっかけは？

コロナ禍での新たな挑戦と、大企業との出会いです。コロナ禍で飲食店が苦境に立たされる中、新たに「防災筋力」という概念を思いつき、商標を取得しました。その後、石井食品さんと防災おにぎり「佰にぎり」を開発することになった際、この商標が大きな意味を持ちました。自社のロゴや言葉を使ってもらう「ライセンス契約」を結ぶことで、大企業相手でも縮こまることなく、対等にタッグを組めたのです。知財はただ守るだけではなく、新しいビジネスを広げる「攻めの武器」になるのだと気づいた瞬間でした。

中村さんにとって、知財（商標）とはどのような存在ですか？

「自分たちの価値を、正しく相手に渡す器」です。もし商標を持っていなかったら、大企業との協業も、単なる「レシピの買い取り」で終わっていたかもしれません。どれだけ商品が売れても自分たちの価値が正しく評価されず、悔しい思いをする起業家は多いです。知財は、自分たちが心血を注いで育てたブランドの価値を可視化し、企業規模に関わらず「対等」にビジネスをするための、揺るぎない証明（器）なのです。

これから起業を目指す方や学生へ、伝えたいことはありますか？

挑戦を恐れないために、知財という「最強の武器」を渡したい。これから夢だった大学の教壇に立ち、学生たちに起業のリアルを教える予定です。その際、絶対に「知財」の授業を組み込みたいと思っています。熱い思いやアイデアを形にする時、理不尽な失敗から身を守る盾にも、ビジネスを爆発的に拡大させる剣にもなるのが知財です。次世代の若者たちが堂々と未来の扉を開けるよう、私の経験を全て伝えていきます。



知財は、本気の挑戦を証明する 「ゲートを開ける鍵(パスポート)」

大阪・関西万博の女性起業家イベント「IP THRIVE Voices」では、登壇した起業家の皆さんの熱量に触れ、非常に刺激を受ける時間となりました。素晴らしいアイデアと実行力を持つスタートアップの方々とお話しする中で改めて感じたのは、「社会課題を解決したい」という熱い思いを、いかにして実際のビジネスに乗せ、社会へ実装していくかの重要性です。そのための第一歩として、大企業との協業に重要な役割を果たすのが「知財(IP)」の存在です。今回は投資家・大企業側の視点から、スタートアップにとっての知財の本当の価値についてお話しします。

大企業との協業において、 スタートアップの前に 立ちはだかる「関門」とは？

キャノンマーケティングジャパンのような事業会社の新規事業部などがスタートアップと協業を検討する際には、いわば「関門」とも言える社内の審査プロセスを経る必要があります。私たちのような新規事業部門が「このスタートアップとぜひ組みたい」と考えても、すぐに協業を進められるとは限らないのが実情です。大企業としては、現在の事業を安定的に成長させていくことも重要なミッションの一つです。そのため、短期的な成果がまだ見えにくい新しい商材については、リスクや適合性を見極める必要があるため、検討プロセスが慎重になることがあります。こうした社内プロセスを進めていくうえで、「なぜそのスタートアップと組む意義があるのか」「将来どのような価値を生み出す可能性があるのか」といった点を、社内外にしっかり説明できることが重要になります。

【PROFILE】新卒で株式会社NTTデータに入社し、SEとして従事。その後、アステラス製薬株式会社にて営業戦略や新規事業開発などを担当。現在はキャノンマーケティングジャパン株式会社のR&B推進本部にて、Well-beingをテーマとしたインキュベーションと、DE&I領域の新規事業開発リードを兼任している。

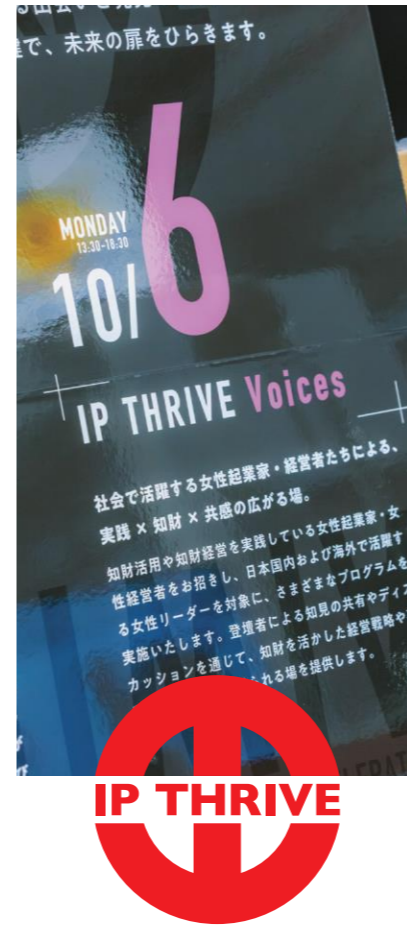


(パスポート)

知財は、協業の「ゲートを開ける鍵」

MADOKA NISHIZUKA

西塚まどか



その「関門」を突破するために、 知財はどのような役割を 果たすのでしょうか？

知財と聞くと、多くの方は自分のアイデアを他社から守るための「壁(あるいは塀)」をイメージするかもしれませんが、しかし大企業とのビジネスにおいては、知財は壁としての意味を持つだけでなく、固く閉ざされた扉を開けるための「カギ」になる面も持ち合わせていると思います。知財というカギがあることで、「この技術やアイデアは他社に模倣されにくい」という独自性を示すことができ、社内で協業を検討する際の重要な判断材料の一つになります。また、そもそも大企業と交渉のテーブルに着くための「パスポート」のような役割も果たします。知財が整理されていることで、技術やアイデアの独自性を客観的に説明しやすくなり、協業の可能性について話が進みやすくなることもあります。



大企業が協業相手を評価する際、 知財はどう見られているのでしょうか？

大企業は協業の際、資金や人材など多くのリソースを投入することになるため、「スタートアップ側がどのような価値を提供できるのか」を示すことが重要なポイントになります。知財を持っていることは、単なる権利というだけでなく、「ビジネスとして本気で取り組んできた挑戦の成果」の一つとしてポジティブに受け止められることもあります。どんなに素晴らしいプロダクトであっても、知財という裏付けがあることで技術や事業の独自性を説明しやすくなり、より踏み込んだ協業の議論につながりやすくなります。このことは大企業との一時的な取り組みにとどまらず、本格的なビジネスとして共創していくための重要な判断材料の一つになり得ます。

最後に、起業家や支援者へ伝えたい思いを教えてください。

知財は、大企業と「対等」に向き合うための、心強いお守りのような存在でもあると思います。これまで女性起業家の方々とお話しする機会が何度かありましたが、大企業を前にすると、どうしても「先生と生徒」のように遠慮してしまう方も少なくありません。しかし、知財という強みを持つことで、それが自信につながり、企業規模に関係なく「対等」に語り合うためのよりどころになるのではないのでしょうか。ぜひ支援者の皆様にも、起業家がビジネスの最前線で自分らしく挑戦できるよう、知財の活用を後押しする形でのサポートをお願いできればと思います。



笑われる夢が、世界を変える。 未来を先取りする「舞台」としての万博。



SHINJI CHIBA

千葉慎二

TATSUYA IMOTO

井本達也

【PROFILE】経済産業省特許庁入庁後、中小企業庁、北海道経済産業局を経て現職。INPIT初の地域拠点 (INPIT-KANSAI) 開設以来、「地域貢献」を軸足に、関西圏の中小企業・スタートアップの課題解決、知的財産を活かした企業経営の実践支援に取り組んでいる。二児の父として、未来を創造する次世代を担う若者の育成にも精力的に活動中。大学生・高専生によるビジネスアイデアコンテストのアドバイザーや理系女子の社会進出・活躍に向けた各種セミナーの開催など、アントレプレナーシップや教育現場に知財の要素を取り入れた施策・企画を推進している。

【PROFILE】1977年生まれ。岡山県出身。アパレルメーカー、デザイン事務所、独立行政法人中小企業基盤整備機構等を経て、公益財団法人大阪市都市型産業振興センター(現:公益財団法人大阪産業局)入職。ファッション×デザイン×行政サービスの経験をベースに、スタートアップ支援事業プロデュースを中心に活動。2021年4月に「遊びをきっかけに躍動する経済を」をコンセプトにsaturdays株式会社を設立。2024年4月より、経済産業省のGIRAFFES JAPANのアドバイザーを務める。趣味はクルーズ。

「IP THRIVE」の仕掛け人であるINPITの千葉慎二部長と、プロデュースを手掛けたsaturdays株式会社の井本達也氏。なぜ彼らは「学生」と「女性起業家」という異なる役者を一つの舞台に集めたのか。その根底にある、本気の挑戦に伴走する支援の形と、思い描く「理想の社会」について語り合った。

なぜ「学生」と「女性起業家」だったのか？

千葉: 万博は「未来を先取りする舞台」です。そしてその主役こそが、未来を想像する学生たちであり、自ら事業を起こし未来を切り開く女性起業家だと考えています。学生は既存の常識に縛られない「可能性」の塊であり、女性起業家は多様な生き方を体現する「ロールモデル」です。この二者が万博という世界の舞台で出会い、対話し、共創することを通じて、「次の時代のあたりまえ」を一足先に形にしてみたかったんです。

子供扱いしない、 本気の「共創」の場。

井本: 実際、学生たちのピッチは驚くほど熱量が高かったですね。私はメンターとして伴走しましたが、彼らを「子供扱い」せず、一人の起業家として本気でぶつかりました。どんなに優れた技術やアイデアでも、社会でどう共感を生むか、誰に届けるかが重要です。女性起業家の皆さんも同じで、自分の人生を自分でデザインし、課題に真正面から挑んできた。その場の誰もが「自分もやってみよう」という決意や「挑戦することが普通だ」という新しい価値観が生まれた瞬間でした。



笑われる夢が、 当たり前に挑戦できる社会へ。

千葉: 僕は、「やりたいこと」を笑われることなく、誰もが当たり前で挑戦できる世の中をつくりたい。性別や年齢、肩書といった属性ではなく、「やりたいこと」と「生み出す価値」で評価される社会。学生が夢を口にした瞬間、一緒に面白がり、支え合う大人がいる。女性が無意識のバイアスや心ない言葉、ライフイベントで夢を縮小せず、自然に「やりたいこと」が選べる。そんな未来の舞台に、この万博をしたかったんです。万博での一日が、参加した若者や起業家、観客の皆さんにとって「未来は変えられる」と実感できるきっかけになるこ



未来の扉をひらく「鍵」としての知財。

井本: そのためには、「女性だから」「学生だから」と特別視することなく。支援する我々大人やサポーター側も本気でなければいけません。月並みな生ぬるい支援ではなく。挑戦者が社会や大企業と「対等」に渡り合うための強力なエビデンス、それが「知財」(知的財産)です。このイベントを経て、知財は単なる守りの壁ではなく、本気の挑戦を証明し、未来のゲートを開ける「パスポート」なんだと再認識しました。知財支援を担うINPITの役割はますます高まりますね。

千葉: おっしゃるとおりですね。我々は普段、知財を企業経営の安定と成長に活かすお手伝いをしています。特許などの権利取得を目指される方、様々な経営課題を知財で打開しようとする方、知財を武器に社会課題の解決やイノベーションに挑戦される起業家の皆さん、日ごろからたくさんのご相談をお伺いしています。2017年に、ここ大阪・梅田に地域拠点を構え、関西の皆様との身近な理解者として、知財戦略の立案や有効な活用手段など、より高度なアドバイスを提供できるよう体制を拡充して、たくさんの方の挑戦を支援してきました。大阪駅からも近いオフィスですので、本冊子をお読みいただき、何かを感じられた方は、ぜひお気軽にお越しください。

井本: INPITという公的な機関が、単なる手続きの窓口ではなく、挑戦者と同じ目線で本気で伴走してくれる。その事実自体が、起業家たちの背中を強く押してくれるはず。今回の万博という舞台での出会いが、これからどんな未来のビジネスや変化を生み出していくのか、本当に楽しみです。

千葉: そうですね。ここから生まれるのは、ビジネスプランだけではありません。「自分もやってみよう」という小さな決意、「あなたと一緒にならできそうだ」という信頼、そして「挑戦することが普通だよね」という新しい価値観。この場所で交わされた熱が、知財という共通の鍵を通じて、5年後、10年後



知財は ここから。



【知財相談はこちらから】

INPIT-KANSAI (近畿統括本部) ホームページ
<https://www.inpit.go.jp/kinki/index.html>
TEL: 06-6147-2811 MAIL: ip-js01@inpit.go.jp

[アクセス]

JR大阪駅から徒歩5分 グランフロント大阪ナレッジキャピタルタワーC 9



IP THRIVE

Academy

つくる力に、 未来をひらく鍵を。

そのアイデア、世界に出せる？
ビジネスへと踏み出す一歩を、知財が支える。

未来を担う中高生・高専生による、
探究×知財×創造の学びの場。

アイデアを社会へ。
学生たちの挑戦が動き出す。
知財がつなぐ“学び”と“ビジネス”。



IP THRIVE Academy

未来を担う中高生・高専生による、
探究×知財×創造の学びの場。

[2025.10.5開催]

INPITは10月5日、大阪・関西万博にて「IP THRIVE Academy」と題し、未来を担う中高生・高専生が社会課題解決に向けたアイデアを披露するイベントを開催しました。本イベントの大きな特徴は、順位を決めるのではなく、一流の起業家メンター陣との対話を通じてアイデアを深める「学びの場」であることです。当日のプレゼンでは、その場にいる多くの学生や観覧者から質問や感想が寄せられ、発表者がそれに真っ直ぐ応えるなど、会場が一体となったインタラクティブで熱気あふれる時間となりました。

「参加チーム(学校)」

アイデア泥棒撲滅委員会

学校名 / 四天王寺中学校
発表テーマ / 知的財産権を保護する方法についての調査

Re:Ceipt(リシート)

学校名 / 大阪桐蔭高等学校
発表テーマ / レシートの再設計で広がる未来

KOSEN ROSE

学校名 / 大阪公立大学工業高等専門学校
発表テーマ / 女子高専生育成のためのSTEAM教育拠点(ROSEミライラボ)の創設と実践

DOME

学校名 / 神山まるごと高専
発表テーマ / ただの寮DX化アプリが、全国の寮生の『寂しい』をなくそうとする挑戦

Mind Benders

学校名 / 四天王寺中学校
発表テーマ / 盗作に関する調査

すいすいくん

学校名 / 関西大学北陽高等学校
発表テーマ / 防災×家族の和 [輪]

万博チーム

学校名 / 神山まるごと高専
発表テーマ / 大阪・関西万博の徳島ブースの制作から次のステップへ

IdentiX(アイデンティクス)

学校名 / 大阪公立大学工業高等専門学校
発表テーマ / タンパク質危機を解決する～Worm Farmer～

▽万博ダイジェストはこちらから INPIT Channel
未来を創る10代の挑戦 | IP THRIVE「Academy」Digest(大阪・関西万博)

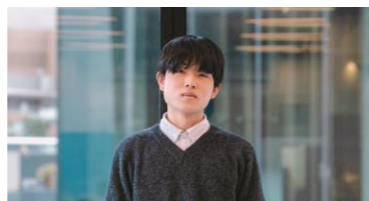


INPIT理事長 / 近畿統括本部長
渡辺 治



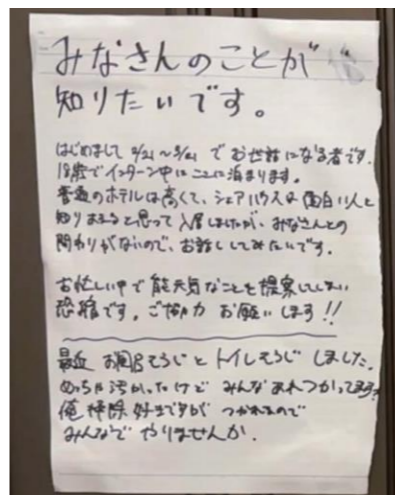


【PROFILE】神山まるごと高専一期生 / 全寮制の寮のDXアプリを開発、学校文化祭で1570人が使う決済アプリを作り300万円の取引を成功させる。地域での事業開発にも力を入れており、そんな活動に半年間密着したプロセスがテレビで放送された。



寮生活アプリ“DOME” という提案

神山まるごと高専のピッチは、会場の空気を一変させました。プレゼンしたのは、誰かの指示ではなく「自分たちが欲しいから」開発した、全寮制の不満を解決するアプリ「DOME」です。Tech担当の中本慧思さんとDesign担当の市川和くんがタッグを組み、美しいデザインと驚きの機能を実装。SwitchBotで洗濯機の稼働状況を確認したり、GPSで朝の点呼を完了させたりと生活をアップデートし、学内利用率は100%です。開発中の「DOMAP」機能では、Bluetoothで「誰かと話したい」気持ちと居場所を可視化し、メンタル面の課題にも踏み込んでいます。彼らの「当事者意識」と「作る力」は、来場した高校生を大興奮させ、アンケートでも大反響。「自分たちの技術で世界は変えられる」可能性を示した素晴らしいピッチでした。



これから、どんな風に 「作る力」を発揮して いきたいですか？

純粋なワクワクを、社会を動かす価値に変えていきたいです。「自分がワクワクするものを作り、共感・納得してくれた方から対価をいただく」のが理想です。手段に固執せず、目の前の課題解決のために「作る力」を発揮し、枠を越えて社会に新たな価値を生み出し続け

アプリ開発以外にも、 新たな領域へ挑戦されている そうですね。

はい。ソフトウェアの枠を越え、未知のハードウェア領域にも挑んでいます。インターネットでの活動に加え、ARグラスの制作や電動モビリティの開発にも挑戦したいと考えています。「今できること」に縛られず、自分の可能性を決めつけずに多様な経験を積んでいきたいです。

最近入居した多国籍な シェアハウスでも、 独自の取り組みをしているとか？

面白い大人と話したくて入居したのに、誰もリビングにいない。「ならどうする?」と、即座に住人が自由にコメントできる交流用SNSを立ち上げました。アクセスしてもらうため、まずはアナログに玄関へ自己紹介の張り紙をしました。最初は無反応でしたが、「風呂掃除しました!」など自分からネタを作って発信し続けたんです。その結果、今ではアプリを通じて韓国から来た住人と食事に行くなど、リアルな交流が生まれました。デジタルに頼るだけでなく、時にはアナログな手段も組み合わせる大事さを実感しています。

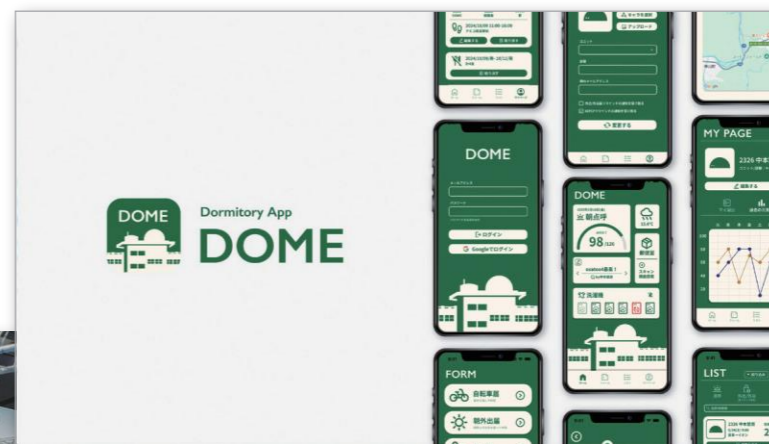
万博でのピッチや メンタリングを経て、 どんな気づきがありましたか？

「誰が価値を感じてくれるのか」という顧客視点を持つことができました。これまで「自分が作りたいもの」を形にしてきましたが、起業家からの助言で、ビジネスとして成立させるには「本当にお金を出してくれるのは誰か(保護者など)」を考えることや自分のアイデアやこだわりを守る手段として、知財を意識することの必要性も知る機会になりました。

いまの自分で立ち止まらない。
想像の先へと進化し続ける「作る力」

SATOSHI NAKAMOTO

中本慧思



高専生が「社会とつながる」ための接点

【PROFILE】名前/中田 裕一(なかた ゆういち)。所属/大阪公立大学工業高等専門学校 総合システム学科/一般科目系(保健・体育)。役職/校長補佐/地域連携テクノセンター長。経歴/筑波大学大学院(体育研究科)修了。専門分野/スポーツ哲学/運動学。現在の活動/産官学連携(共育連携)/アントレプレナーシップ教育



YUICHI NAKATA
中田裕一



知財は専門的と感じる人も多いですが教育現場でどのように扱って良いのでしょうか？

高専のカリキュラムにも起業家マインドを醸成する科目が増えてきました。問題解決型授業としてチーム編成しビジネスプランを考える機会を提供しています。その中でINPITさんのご協力により、知財の制度や調査・検索する手法などをレクチャーいただきました。学生の目線や理解度に合わせた内容にアレンジいただき、少しずつですが関心も高まってきたと感じています。これを継続することで知財が身近なものになることを期待しています。

学生が社会とつながるために、「知財」はどのような役割を果たすとお考えですか？

自分たちのアイデアの価値を知る「外の世界との接点」になります。知財を学び、意識することは、単なる権利の話ではありません。自分たちが生み出した技術が、すでに世の中にある特許なのかを調べる。もし類似のものがなければ「これは世界を変えるかもしれない」という自信に繋がりますし、似たものがあれば世の中のニーズを知る機会になります。また、先行する特許と比較することで自分たちの強みや差異に気づくヒントにもなります。自分たちのアイデアが社会全体の中でどう位置付けられるのかを測る「接点」として、知財は非常に重要なツールになるのです。

今の教育現場に対して、どのような課題感をお持ちだったのでしょうか？

「作る力」を「社会に届ける力」へと昇華させる環境が不足していました。高専生たちは素晴らしい技術力を持っていますが、どれほど優れた技術やアイデアでも、社会に出して誰かに使ってもらえなければ意味がありません。自らのアイデアで新しい事業を立ち上げ、社会課題を解決できるような人材を育てたいと願う一方で、学校という閉ざされた環境だけではそれを教えきれないという強い危機感がありました。



これからの時代、高専の教育はどう変わっていくべきでしょうか？

教員自身が意識を変え、社会とつながる本気の環境づくりが必要です。「社会とつながる」。この意味を理解して行動できなければ、これからの教育は時代に取り残されてしまいます。私たち教員自身も意識を変え、INPITや外部のプロフェッショナルと積極的に連携し、実装体験ができる環境を整える必要があります。優秀な若者たちが失敗を恐れずに挑戦し、未来の扉を自らひらける本気の教育現場を作っていきます。



社会とつながる接点。未来を創る「知財」という授業。

大阪公立大学工業高等専門学校で、学生たちの指導にあたる中田裕一先生。圧倒的な技術力を持つ高専生たちが直面する「ビジネス化の壁」。そして、彼らが教室を飛び出し、社会とつながるために必要なものは。万博イベントでの熱狂と、次世代教育の最前線で見つけた「知財」の新しい価値を紐解きます。

万博イベントに参加し、学生たちにどのような変化がありましたか？

第一線で活躍する「本気の大人」との出会いが、彼らを大きく変えました。最も大きかったのは、起業家である井本さんとの出会いです。学校ではどうしても「教員と学生」「評価する側・される側」という枠組みにはまりがちです。しかし、第一線で活躍する大人は彼らを子供扱いせず、一人の人間として「社会でどう共感を生むか」を真剣に問いかけてくれました。学校のリソースだけでは引き出せなかった圧倒的な成長を目の当たりにし、外部の力と連携することの重要性を痛感しました。

